

未来への伝承

亀城公園のあゆみ

市のほぼ中央にある亀城公園は、四季折々にさまざまな表情を見せてくれます。人でにぎわう日中だけでなく、静かな早朝、桜の時期にライトアップされる夜間、それぞれ趣が異なります。さて、亀城公園が土浦城址であることをご存じの方は多いことでしょう。

土浦城が歴史上登場するのは、永正13(1516)年ごろです。戦国大名小田政治の家臣菅谷勝貞が、若泉五郎右衛門からこの年に土浦城を奪い取ったことを示す史料があることから、遅くともこの年までには土浦城は築かれていたと考えられます。

土浦城の別称「亀城」の由来は、堀に囲まれた本丸の姿が水に浮かぶ亀のように見えた、城を囲む水戸街道の外郭が五角形で亀甲に似ているなど諸説ありますが、定説はありません。実は「亀城」の呼び名は江戸時代に編まれた「報恩種」という本の、漢詩の一節に登場します。

土浦城は、明治6(1873)年の廃城令まで、城としては350年余り用いられました。それでは、亀城公園の公園としての歴史はどれくらいあるのでしょうか。

明治6(1873)年、明治政府は公園制度を導入し、米沢や高知、松山城などが公園として整備されました。土浦城の場合、本丸は土浦県や新治県、茨城県土浦支庁、新治郡役所の庁舎として、外丸は裁判所として用いられたため、明治初めには公園になっていません。

大きな動きがあったのは明治31(1898)年でした。城址を所有・管轄していた土屋家や旧藩士、茨城県が土浦町に、公園建設を目的として城址を無償譲渡したのです。

しかし、これですぐに「亀城公園」ができたわけではありません。明治末年までの15年余り、それに続く大正時代の15年余り、合わせて30年



昭和初期の亀城公園櫓門(絵はがき・当館所蔵)

ほどは整備や管理が進まず、城址には雑草が生い茂り、草が深くて散歩ができるような状態ではなかったといえます。

土浦町が本格的な公園整備を行うことになったのは、昭和9(1934)年のことです。自治会館として用いられていた旧新治郡役所が、茨城県から土浦町に払い下げられたことが契機になりました。これに先立ち、宮内省技師として庭園事業を担当していた市川之雄、大蔵省技師の楠岡悌二らが公園の設計図を作っていました。土浦町ではこの設計図をもとに工事を行い、翌年3月には、ひょうたん池の造成、土塁の整備、樹木や芝生の植栽、堀の延長などが完成しました。呼称が「亀城公園」に統一されたものの年の2月です。

新聞も公園の誕生を大きく報じました。市民が集える場になったのをこの昭和10年と考えると、亀城公園の歴史は今年で85年です。市のほぼ中心にある広い緑地、市民憩いの場として長く守り伝えていきたい場所です。

※この文章は野中勝利「土浦城と城址の公園化」を参考にしています。この論考は土浦市立博物館第41回特別展図録『土浦城―時代を越えた継承の軌跡―(令和2年刊行)』に収録されています。

岡市立博物館(☎824・2928)